ニノ丸くんが調査中
石川宏千花 作
うくいす舞子 絵
天狗さまのお弟子とり
まっしょうめん!
夢を打つ勇気
あさだりん 作
新井陽次郎 絵
ぼくのまつり縫ら
手芸男子は好きっていえない
神戸遥真 作
井田千秋 絵

ぼくのまつり縫ら

手芸男子は好きっていえない

神戸遥真 作
井田千秋 絵

偕成社

1　まつり縫いの助っ人

チク、チク、チク。

放課後の教室で、ぼくはひとり、もくもくと針をうごかしていた。

制服のズボンのすそを、うっかりひっかけてみっともない感じにしちゃったのが今日の五時間目のこと。成長期を見こして作られた丈の長い制服のズボンの、すそあげ部分がほつれてしまった。着がえた体育の短パンで帰ってもよかったけど、先週、足をケガしたばかり。またなにかあったのかと母さんにきかれたくない。

というわけで、自分ですそあげをしているというわけだ。

教室の冷房はすでに切られてて、額や背中にじんわり汗がにじむ。七月、夏休み前の

学校はとにかく暑い。さっさとおわらせて帰ろうって気持ちを強くし、ぼくは針の手を速めてく。

チク、チク、チク。

全開の窓からはグラウンドのサッカー部や野球部のかけ声がきこえてきて、針と糸に集中しようと思っても、ついつい重たい気持ちと左足の痛みがよみがえる。

先週、サッカー部の練習中にケガをした。

練習試合の最中にボールのとりあいをしてころんだ——とかだったらまだいいのに、グラウンドのすみっこ、雑草すら生えてない本当になんにもないところですっころんだ。

左足首をひねったときにじん帯がのびてしまったそうで、「ジンタイソンショー」って診断された。ころんだだけでそんな大ケガになるなんて知らなかった。

歩くのもひと苦労って状態で、サッカー部の練習はしばらく休み、夏の大会の出場は絶望的。もっとも、なにもないところでころぶくらいどんくさいし、レギュラーには選ばれてなかったけど。

チク、チク、チク。

……サッカー部、むいてないよなぁ。
この数か月間、中学に入学してから何度もしてきた自問自答をまたくりかえす。
チク、チク、チク。
サッカー部、むいてないんだけどなぁ。
いまから三か月前、四月のある日の放課後のこと。
帰りのホームルームがおわってすぐに、カイトにこんなふうにきかれた。
『おれ、サッカー部の見学行くつもりなんだけど、ユートは部活どうすんの？』
べつの学区から中学入学と同時にひっこしてきたぼくには知りあいがまったくいなくて、最初に話しかけてくれたのが出席番号がひとつ前のカイトだった。
気さくで明るくて男子も女子も関係なく友だちが多くて、あといかにも運動神経がよさそうな文句なしのイケメンだ。
まだまだ知らない人だらけの教室で唯一まともに話せるカイトが、サッカー部に行くという。であれば、ぼくのこたえは決まってる。
『それなら、サッカー部の見学、いっしょに行ってもいい？』

こんがらがっちゃって、なんかもうダメだ。
そんなぼくをじっと見てから、サンカク先パイはおずおずときいてくる。
「……ピンクだと、カワイイ？」
ぼくは全力でうなずいた。
すると、サンカク先パイの顔がたちまち困惑したものに変わってく。
「……ピンク、好きなの？」
やけっぱちな気持ちでもう一度うなずいてから、ハッとした直後。
サンカク先パイがぷっとふきだした。
先パイはかかえたクッションに顔を押しつけて肩をゆらし、声をこらえるようにクックッと笑いはじめる。
……だからヤだったんだ。
正直になった結果がこれだ。
ぼくの気持ちは、たちまち重たいものに変わってく。
「……男子のくせに、ピンクが好きっておかしいですよね。」

幼稚園生のころのこと。
好きな色をきかれて「ピンク」ってこたえ、笑われたことがある。
ピンクは当時大切にしていたウサギのぬいぐるみの色で、だからなんで笑われたのか、すぐにはピンとこなかった。
『男なのにピンクかよ。』
同じ組の男子にそうからかわれ、男子たるもの好きな色にはピンクを選ばないものらしいってことにはじめて気がついた。
以来、好きな色をきかれるのが苦痛になった。「青」「緑」「黄色」。いつもいつも、その場でテキトーな色をこたえ、小さなウソを重ねてきた。
それもこれも、こういう空気になるのがイヤだったからだ。
……サイアク。
手芸屋さんに行ってるのもバレるし、このあいだからホント、ろくなことがない。
部長命令だろうがなんだろうが、もうここからでていこうって思ったそのときだった。
「……わたしは、ネクラのくせに、ピンクが好きだよ。」

そういってサンカク先パイがクッションから顔をあげた。もう笑ってない。
「……小学生のころ、『おまえみたいなネクラが、ピンクでフリフリ好きなのかよ』って、男子に、からかわれたことがある。」
そうボソボソ話しはじめたサンカク先パイは、急にすくっと立ちあがると、つめよるみたいにぼくのまんまえに立った。
「べつにいーじゃんって思わない？」
サンカク先パイがずいとこちらに身をのりだし、あまりの近さにのけぞるようにしてこたえた。
「お、思います。」
「だよね？　べつにわたしがなにを好きでもいいよね？」
「いいです、いいと思います！」
「好きなものを好きっていって、なにがわるいのさっ!!」
サンカク先パイはそう声をあげると、荒らげた呼吸をおちつかせるように一歩さがった。ぼくもつられるように一歩さがり、バクバクいってる心臓をおさえる。